

## J. Keats: *Poems 1817* の研究\*

出口泰生\*\*

1817年 J. Keats の処女詩集 *Poem* の出版の年は、いわば後期ローマン派の出発にふさわしい年であった。Waterloo で連合軍を率いる Welinton は Napoleon を破り、英吉利の危機はもはや遠のいた感があった。文壇ではすでに Henry James Pye は死し、Robert Southy が桂冠詩人の跡をおい、一般読者の趣向は、次第に Sir Walter Scott の中世ぶりの詩歌よりも、Byron の近代の毒を含んだ *Child Harold* に向いつつあった。Keats *Poems* 刊行の前年 1816 年は、Byron の *Child Harold Canto III* をはじめ、Leigh Hunt の *The Story of Rimini*、Coleridge の *Kubla Khan*、Shelley の *Alaster* などの新しい詩が、続々と世にあらわれていた。そして 17 年には Byron の *Manfred* が上梓された。

当時文壇を大きく動かす力となっていたものは、London と Edinburgh で出されている雑誌の批評であり、ここに掲げられる作品の評価が、一般読者に影響力をもっていた。なかでも Lockhart の編集する *Quarterly Magazine* と、Blackwood の編集する *Edinburgh Review* は、保守的な論陣を張りながら、それぞれ 1 万 2 千<sup>(1)</sup>から 4 千の発行部数を誇っていた。そして他にも Hunt の *Examiner*、William Jerdan の *The Literary Gazette*、*New Monthly* など

があった。1817年 *The Times* の日刊発行部数は八千と推定されているし、これら新聞、雑誌の購読者の数は、当時の新しい勢力となりつつあった知識階級の層の厚さを、明らかに物語っていると思う。しかしながらこの時点においては、新旧の交錯は、むしろ後者がその勢いを得ていたのは、当然と言わねばならないであろう。Scott の小説の印税は、Lockhart<sup>(2)</sup> によれば毎年 1 万ポンドを下らないと言われたのに対して、Shelley の *Queen Mob* は僅か二百五十部を出したに過ぎなかった。

Keats の処女詩集 *Poems* が、六シリングという値段を表示した白ラベルを付けて出版されたのは、1817年 3月 3日の月曜日だった。Oxford 通りにほど近い、Cavendish Square にある、C. J. Ollier 社から上梓されたのである。Ollier 社の経営は、Charles と James Ollier の兄弟でなされており、彼らはともに Leigh Hunt の周辺にいた新思想のシンパであると同時に、アマチュアの音楽家、詩人でもあった。この兄弟は Shelley の詩集 *Queen Mob* を上梓したこともあって、いわゆる当時の 'new poetry' の理解者であった。それは彼らが Hunt に交誼を得ていたからであって、この Keats の処女詩集の誕生は、直接的にも、間接的にも Hunt の影響を除外しては、考えられないであろう。

まずこの処女詩集の出版について、もっとも

\* A Study of J. Keats' *Poems 1817*

\*\* Yasuo DEGUCHI

(1) *Quarterly Magazine* および *Edinburgh Magazine* の発行部数は、*English Literature 1795-1837* (Oxford) による。

(2) *Ibid*; *The Literary Scene of 1915*. による。

積極的に押し進めていたのは、Enfield Academy 以来の学友、Cowden Clark であった。彼は早くから Hunt の *Examiner* 誌の読者となり、この気鋭の評論家、詩人 Hunt<sup>(3)</sup> その人とも親交を結ぶようになり、さらにまた Hunt を通じて Ollier を知り、Clarke は友人 Keats の詩集出版の話を Ollier に持ち出したのである。Clarke は Keats が Enfield に在学の間から、すでに Keats の鬼才を認め、Enfield を去ってからも相変らず誠実な友として、Keats の詩才を見守っていた。1816 年の 12 月、Shelley と Keats は、はじめて Hampstead の Hunt の家で顔を合わせた。たまたま Keats が Ollier から近いうち、処女詩集を出版するという話を、Shelley に伝え、彼はそれを屢らく見あわせるように忠告したのである。Shelley にしてみれば、同じ出版社から出した自分の処女詩集 *Queen Mob* が、保守的な批評家から悪言をもってしか迎えられなかった事実があった。言うまでもなく、Keats は Shelley のこの忠告に従わなかった。彼にとっては、そうした保守的な批評家の悪評は、十分に予想できるものであったが、しかしそのような好ましくない未来を予想して、現在の仕事の手を引くよりも、未来に向って少しでもあるき出すこと、そこに自ずから自分の道が拓けてゆくことと確信していた。Shelley<sup>(4)</sup> と Keats との間には、いわば交わろうとしても交われない、不思議な運命の糸のようなものがあったように思われる。この両者のあいだには環境や性格上の差違もかな

(3) Clark の父 Charles は Enfield Academy の院長であり、父が早くから Hunt の *Examiner* の読者であったので、この父に感化を受けていたものと思われる。

(4) E. Dowden: *The Life of Percy Bysshe Shelley* (1896) Kegan Paul には、Shelley が Keats に真の愛情をいだいていなかったとある。

りあった。後年 Shelley が Hunt とともに Keats を、彼の Marlow の私邸にながいがいあいだ滞在をすすめたときも、また伊太利から同じ病いに倒れた Keats を招待しようとしたときも、Shelley のこれらの厚意は実らなかった。Keats にとって Shelley は、Hunt のような先輩詩人というよりは、ライバルであり、Shelley の忠告や擁護をそのまま受けるには、彼の一本気な独立心がさまたげになったのである。

さて Keats の処女詩集は、Shelley の忠告にもかかわらず、Clarke の温かい友情に支えられて、意外に早く日の目を見ることになったのである。Clarke の友情は、この詩集の隅々にまで行き渡っていることを見逃してはならない。もともと Keats を詩に向わしめた大きな動機をつくったのも Clarke<sup>(5)</sup> であったし、彼の助言や援助がなければ、処女詩集はこのような形で編めなかったかも知れない。またこれが一冊の詩集として世に出るまでには、新しい詩人として Shelley, Renolds とともに Keats の才能をいち早く認めた Hunt<sup>(6)</sup> の功積も忘れることができない。そして Byron, Shelley につづいて、この無名の新人の出版を引き受けた、新しい出版人としての、Ollier 兄弟の慧眼をも強調しなければならない。彼らは Keats の処女詩集の完成の晩に、新しい詩人の誕生を祝して、「Keats よ、あなたのその向上してやまぬ精神を讃えます」<sup>(7)</sup> と、書き送ったのである。

\*

\*

Keats の *Poems 1817* をみると、次のような特徴が指摘できると思う。ひとつはこの詩集

(5) Enfield Academy での Keats の詩への興味は、Clarke によるものと考えられる。

(6) Houtchens: *Leigh Hunt's Literary Criticism*: (1956) Columbia U. P. pp. 30-31.

(7) Bate: *John Keats*, (1963) Harvard U. P. p. 105.

は、彼の他の詩集に較らべて、それは大凡初期の詩集の特徴としては一般的な、自伝的要素がきわめて濃厚だという事実である。つぎには比較的短詩が多く、これはむしろ第一の特徴と噛み合うのであるが、はっきりとした主題をまだ擱んでいないという点である。まずはじめに、この詩集の自伝的要素から考察してみよう。

この詩集におさめられた詩片のなかで、最も初期のものは *Imitation of Spenser* であり、これの作は 1812 年とも 1814 年ともいわれるが、今日では後者の説<sup>(8)</sup>をとるのが常識である。すなわち詩人が 19 才に近い頃の作品である。Keats は 1804 年、父親 Thomas を交通禍で失くし、翌年には祖父 John Jennings が死し、六年後には実母 Francis の病死に出会い、この間にもふたりの伯父 Thomas および Midgely の死を見送ったのである。だから Keats 四人兄弟、George, Thomas, Fanny にとって、ただひとりの肉親は、London の在、Edmonton に住む老婆 Alice のみであった。Keats は 1803 年(この頃はまだ父母は健在だったが)、パブリック・スクール、Harrow への進学をあきらめて、祖母 Alice の家から、さほど遠くない Enfield にある学校に入学した。

さて Enfield の自然と風致は、Shakespeare の生地 Stratford-upon-Avon にも比較される「村落美の極致」といわれるほど美しい所である。そこに余り生徒数の多くない、Clarke Academy があった。この学校は生徒数が少いので、教師と生徒、あるいは生徒たちのあいだにも、望ましい人間的なつながりが、つねに存在していた。校長の John Cowden Clark は立派な教師で、新しい自由思想にも理解をもち、

詩歌を愛したが、Keats にとって幸わせだったのは、この J. C. Clark の息、Charles というよき友を得たことである。この交友は先にも少し触れたように Keats が Enfield を去った後までもつづいたのである。Keats が *Imitation of Spenser* を書いたのも、Clark がはじめて Spenser を読んで、その詩美に魅せられ、その感動を Keats に伝えたのである。当時 Keats はすでに Enfield の学校を去り、Edmonton の外科医院の助手となつて、すでに三年もすぎていたのである。

1815 年にはこの詩のあと、*To Peace* をはじめ、*Written on the Day that Mr. Leigh Hunt left Prison* と、*To Hope*、さらに *On receiving a curious Shell, and a copy of Verses, from the some ladies* と、*To Some Ladies* を書いている。後の二編はこの頃友人となつた George F. Mathew の妹 Caroline と Anne をさすのであるが、Mathew との交友は夏にはじまり、秋には終っていた。こんなことは他の友人には見られないことであり、情誼にあつい Keats には珍らしいことであった。これらのいくつかの詩のなかで、*To Hope* を見ると、Keats の日常の心情がもっとも如実に顯われていると思う。

When by my solitary hearth I sit,  
And hateful thoughts enwrap my soul  
in gloom;  
When no fair dreams before my mind's  
eye flit  
And bare health of life present no  
bloom;  
Sweet Hope, ethereal balm upon me  
shed,  
Wave they silver pinion o'er my head.  
孤り炉辺にすわり、忌むしい想いが

(8) Allen Ward: *John Keats* (1963) Viking Press  
も Bate: *Ibid* も 1814 年説をとっている。

暗くわが心をつつむとき、また  
 うるわしき夢が心のまぶたに浮ばず、  
 健康をそこねて皮膚は色つやをなくす時。  
 うるわしい希望よ、軽ろやかな芳香をわが  
 うえに撒きちらし、  
 銀の翼をわが頭のうえにはばたかせよ。

詩人にはまだ霧のような想像力や空想が、訪れて来ないのである。そして hateful thoughts (忌わしい想い) が、希望のない日々を支配している。おそらくここには父と母、祖父と祖母などの肉親との、あの悲しい絶望的な離別の感情があるのであろう。そうした暗い絶望にはまり込むと、そこから仲々脱却することの出来ない若さが、まだこの詩人にはあった。そして同じような、孤独に苦悶する幼き日の詩人の姿は、O; *Solitude* というソネットにも見ることが出来る。このソネットは 1815 年の秋に書かれたものであるが、Keats はこの年の 10 月 Edmonton の Abbey のもとを離れて、外科医の免許を取るために、London に来たのである。

O, Solitude! If I must with thee dwell,  
 Let it not be among the jumbled heap  
 Of murky buildings

おお孤独よ、おまえと伴もに住まねばならぬなら、この陰気な建物で混雑したところはゆるしておくれ。

ここに見られる the jumbled heap of murky buildings は、彼が Guy's Hospital School に入るために住むこととなった Borough の街の雑踏をさすのである。それは正確には Dean Street 八番<sup>(9)</sup>であり、London Bridge を渡ってすぐ左手におれたところ、Guy's Hospital は至近の距離にあった。このあたりの当時の模

様は、Prof. Bate の近著、*John Keats* の *The Borough 1820* の挿絵より推測出来るのであるが、近くには刑務所があったり、Keats の手紙によれば「汚なくてけもの住むような所」<sup>(10)</sup> だったのである。だからそれは Enfield や Edmonton の風致には、とても較らべものにならなかった。Keats は 'born within the sound of Bowbell' の、いう所の生粋の cockney として生れ落ちたのであるが、七才のとき Enfield の学校に入学して以来、約十年というものの、London に住んだことがなかった。であるから久しぶりに、しかもそれが名代の汚ない場所であってみれば、この都会生活に孤独といや気がさすのは当然であろう。Keats 兄弟の後見人 Abbey は、Keats を一人前の外科医に育てるために、Guy's Hospital にしばらく通わせ、その免許を得たら、やはり London の在の Tottenham というちいさな町で、外科医院をひらかせるつもりだった。そして Keats は Hospital では、四つの講座を聴講したのである。すなわち解剖学と生理学講座(二単位)、薬理学と実験(二単位)、化学(二単位)、医学材料(一単位)の四科目である。翌 1816 年 7 月 Keats はこれらのコースを修了し、修了後満二十才になれば、自動的に外科医としての地方での開業免許<sup>(11)</sup> が与えられることになっていた。しかし満二十才になっても、Keats は医家となる道を選ばなかった。このことで Keats は Abbey と口論したことがあった。Abbey は自分の意志どおりにならないので、腹を立てたのである。Keats はコース修了後も、いわゆる dresser として、この Hospital につとめてい

(10) J. Keats' Letter: To C. Clarke Oct., 9. 1816.

(11) Bate は London での開業には、Keats のような短期講習は許可されないとしている。

(9) 現在 Dean St. 8 は、London Bridge Station となって存在しない。

た。その仕事は患者の包帯を取り換えたり、傷口を洗ったりするのがせいぜいで、決して面白いものではなかった。Keats は肉体の解剖家よりも、精神の解剖家、治療者となる道を選んだのだが、それには一寸の迷いもなかった。ただ Abbey の憤慨はおさまるはずはなく、Keats が *Poems* を彼に送ると、「おまえの本は難かしいばかりで解らない、どうせ解ったとしたって、いいところは無しさ」<sup>(12)</sup> という返事がかえってきた。Keats は Borough に住んでいたとき、一度健康上の理由で海辺の Margate に行ったことがあるが、1816 年 10 月、彼は久し振りで弟たちと一緒に Cheapside、七十六番に住むことになった。*To Brothers* と題するソネットはここで書いたものである。

Small, busy flames play through the  
fresh laid coals  
And their faint crackings o'er our silence  
creep  
Like whisper of the household gods  
that keep  
A gentle empire o'er fraternal souls.

ちいさな、赫々ともえる焔が焚きくべたばかりの石炭に燃えひろがり、パチパチはじく音がこの静寂にしるびこむ。

兄弟の魂のうえに穩かな帝国が支配する家の守り神の囁きのように。

ここには Borough での暗い、退屈な日々の心情は霧散している。暖炉の赫々と燃える石炭の焔を眺めていると、兄弟一緒にくらせる幸わせが身にしみるのである。この Cheapside の仮居は、Borough の下宿とは雲泥の差があった。この通りは St. Paul の裏がわをはしり、Oxford 通りにつながる可成り広い通りで、石

や練瓦の四、五階だでの、美しい邸宅や商店が並んでいて、落ちついた風格があった。Charles Lamb の住いもこの近くにあった。この Cheapside での生活は、快適なものであったから、読書や創作の筆もおおのずから進んだのである。

この頃書かれたソネット、*To one who has been long in city pent* とか、*After dark vapours have oppressed our plain* には、ようやく先の Borough での生活体験が、一つの厚みをこの詩にあたえるまでになっているのである。

To one who has been long in city pent,  
'Tis very sweet to look into the fair  
And open face of heaven,—to breath a  
prayer

Full in the smile of the blue firmament.

都会で長い間とじ込められていたものにはうるわしく晴れあがった大空を見あげ——蒼い天空の微笑みをみて、祈禱のこぼれ口にするのは、こよなく美しい。

City の意味しているのは、ここでは Cheapside よりむしろ、「動物の住むような」Borough の事であり、不快な都市の生活体験と、つまり久しぶりに訪れた Edmonton の自然の悦楽とが、鮮かに対比されている。そして今まで余り気付かなかったような自然の美しさが、より一層意識されるようになってくる。Keats の自然美への approach は、Wordsworth<sup>(13)</sup> や Hunt、あるいはさらにさかのぼれば Chatterton や、Shakespeare や、Spenser などから、その目を養われ、image を形づくられたのであるが、実生活の体験、つまり都市生活と田園生活との対比などが、意識面でかなり影

(13) Thora Balslev: *Keats and Wordsworth* Copenhagen, (1962) は Keats と Wordsworth の関係比較を論じた最近の注目すべき業績である。

(12) Bate: *Ibid*, p. 117.



らより重要視されなければならないと思う。したがって「*Hunt* の不快なマンネリズムが、*Keats* の初期の詩のあらゆる場面に出てくるのは、決して不幸なことではない」<sup>(15)</sup> という指摘は、*Keats* のために名誉なことにちがいない。*Keats* 詩集の扉につけた *Dedication* には、

When under pleasant trees  
Pan is no longer sought, I feel a free,  
A leafy luxury, seeing I could please  
With these poor offerings, a man like  
thee.

たのしき木々の下に牧神はもう見当たらないが、わたしには、こんな貧しい捧げ物でもあなたのように喜ばせることが出来るのだから、自由な、葉の茂みの悦楽を感じる。

と並々ならぬ敬愛をそそいでいるのである。*Hunt* は *Keats* にとって始めて知遇を得た、唯一の規成詩人であり、*Clarke* を通じて *Hunt* のあと押しがあったためにこの詩集が日の目を見たのであるから、*Hunt* への献詩を扉にもって来た、この若き新詩人の心情は十分に理解できるのである。*Keats* は *Hunt* から悪い影響を受けたとも指摘されることがあるが、彼の詩に社会的なひろがりや厚みとをあたえ、1815年の春の *The Story of Rimini* は、保守的な批評家たちはこれを問題にしなかったけれども、*Keats* は *Byron* とともにこの詩に魅せられたのである。そして「*Keats* 詩集のなかでもっともよいものは *Hunt* から影響された」<sup>(16)</sup> という *Grierson* の言のように、*I Stood tip-toed upon a Little Hill* と *Sleep and Poetry*

には、むしろ *Elizabeth* 朝の *Spenser* はもとより、*Wordsworth* にいたるまでの影響も明らかであるが、この*Keats* 詩集の中での二番目に長い *I Stood* の詩の副題にも、*The Story of Rimini* からの詩行、Places of nestling green for poets made を持って来たのを見ても、今更 *Hunt* の影響を細部にわたって例証するまでもなく、その心理的な影響の大きさは、充分首肯し得るのである。

さて *On first looking into Chapman's Homer* は、1816年の秋10月 *Borough* に住んでいた当時、たまたま *Little Warren St.* の義兄の家を下宿していた *Clarke* を訪ねたとき、彼から *Homer* の訳本を見せられ、その夜はふたりで夢中になって *Chapman* 訳の *Homer* を読み、その感動をソネットにたくし、同年 *Examiner* 誌12月号に掲載されたのである。しかしこの詩の創作の過程をみると、*Keats* の希有の天才が如実にあらわれているように思われる。すなわちその夜 *Keats* と *Clarke* とは *Homer* を夢中で読んでいたうちに、いつの間にか朝が来てしまった。詩人は興奮のさめやらぬまま *Borough* への家路についた。ふつうならば *Warren St.* から *Borough* までは、あるいてももの三十分もかからないところであった。だがこの朝の路は、一時間近くかかったかも知れない。*Keats* は *Homer* の感動をゆっくりと噛みしめるように、そしてソネットの詩形という枠のなかで、詩想を練りながらゆっくりと歩いていった。このソネットは、二時間から四時間のあいだに書きあげられたと推測されている。*Miss Lowell* が初稿だと言い、*Finney*<sup>(17)</sup> が恐らく再稿にちがいないとする *Lo-*

(15) Bate: *Ibid.*, p. 78.

(16) *Grierson and Smith: A Critical History of English Poetry* (1950) Chato and Windus, p.373.

(17) *Finney: The Evolution of Keats' Poetry*, Russell and Russell, p. 121 (1963).



きついている。

Where swarms of minnows show their  
little heads,  
Staying their wavy bodies 'gainst the  
streams,  
To taste the luxury of sunny beams  
Temper'd with coolness. How they  
ever wrestle  
With their own sweet delight, and ever  
nestle  
Their silver bellies on the pebbly sand.  
If you but scantily hold out the hand,  
That very instant not one will remain;  
But turn your eye, and they are there  
again.  
The ripples seem right glad to reach  
those cresses,  
And cool themselves among the em'rald  
tresses;  
The while they cool themselves, they  
freshness give,  
And moisture, that the bowery green  
may live:

そこに柳ばえの群れが、小さな頭を動かし、  
流れに逆らい、きらきらと上る魚体をとど  
め、

冷風をさそう陽光のたのしみを味わってい  
る。

それは甘い愉悅にひたり、さざれ石の川床  
に

銀いろの腹をいつもすり寄せている。

もしも おまえがすこしでも手を出したら、  
みんなはすばしっこく逃げて行ってしま  
う。

だが目を転じて再びそこを見てごらん。

さざ波はこのみずたがらしをぴちゃぴちゃ  
させ、

また瑠璃いろの茎の根を冷やしながら、た  
のしんでいる。

さざ波が水をひやし、うるおいと活性とを  
与えれば、

生い茂るその水草もいきいきしよう。

こうした詩句は、主題とからませるなら  
ば、たしかに冗慢にすぎるし、主題を曖昧にこ  
そすれ、真の象徴性を具備するとは言い難い。  
しかしこうした詩句をそれ自体、あまり確かで  
はないその主題と切り離してみるならば、単なる  
自然描写以上のものを示しているように思  
う。すなわちこの詩人が、詩人としての自覚に  
立ったとき、彼のまずはじめに見たものは、こ  
うした自然であったのだ。自然の様態を、でき  
るだけ美しく描き出すこと、ここに新しい詩の  
世界と彼のイメージが拓かれてゆく。それはち  
ようど、ルネッサンスにおける人間の発見が、  
即自然の発見であったように、Keats の人間と  
しての解放が、こうした詩の行間に行き渡って  
いることを見逃すことはできない。それがたと  
い未熟ではあっても、要するに彼がまだことば  
を発見する以前の過去から、いまはこうした自然  
を通して未来の可能性にむかって自我を解放  
したのである。このことの意味は、この処女詩  
集を評価するばあいに、決して忘れてはならな  
い。

Keats はこの頃すでに 'Scenery is fine, —  
but human nature is finer'<sup>(18)</sup> という考えを  
もっていた。それは *I Stood* から *Sleep and  
Poetry* にいたると一層明確になり、後者にお  
いて 'human nature is finer' をより具体的  
に、顕わそうとするのである。しかしここでも  
彼は、詩人としての自覚を表明するにとどまる。

Yes, I must pass them for a nobler  
life,

Where I may find the agonies, the  
strife

Of human hearts.

(18) J. Keats' Letter: B. Baily Mar., 13. 1818.

そうだ、わたしはそれをより高貴な人生に  
まで高めねばならぬ。人間の心の苦悩と、  
闘いとがそこにあるのだ。

新しい詩の主題は、主題としてはここで明確  
にされたのである。しかしながらその主題の真

のシンボルは、詩のなかに定着していない。こ  
の詩においても、詩人が美として捉え、それに  
イメージを与えているものは、自然であり、な  
かんずく Flora や Pan の世界であった。